シリーズ　しまねの遺跡　発掘調査パンフレット 11

史跡出雲国府跡

2022 年
島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

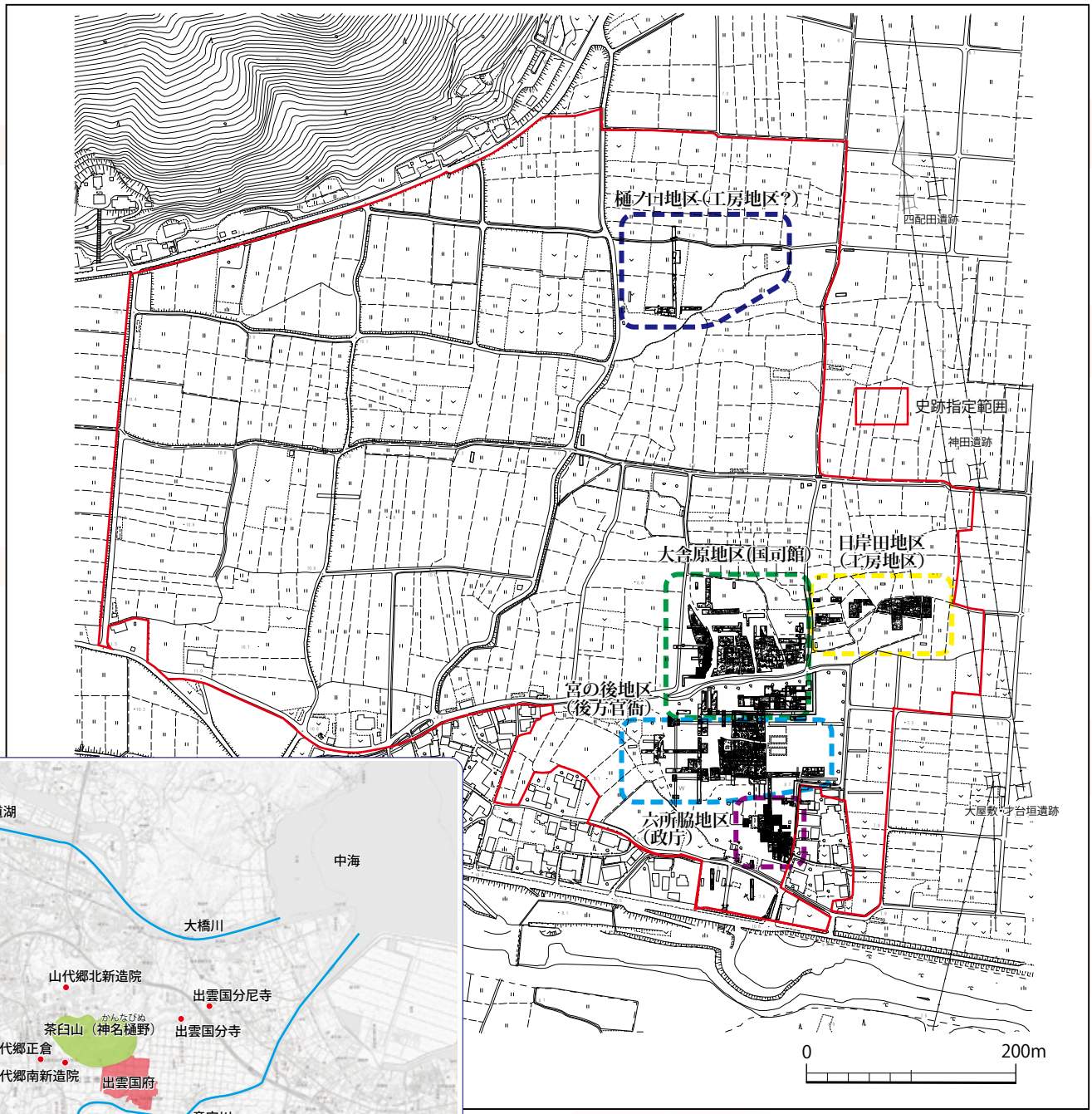
国府とは

国府とは、奈良時代（約1300年前）に全国60余国にそれぞれ置かれた役所で、現在の都道府県庁のような施設です。地方政治の中心となる政庁をはじめ、周辺の公的施設を含めて、「国府」と呼んでいます。

出雲国府は、現在の松江市大草町に置かれ、六所神社周辺に政庁があったことがわかっています。『出雲国風土記』（733年編纂）には、国府の周辺に意宇郡家や黒田駅家、意宇軍団など、さまざまな施設があったことが書かれていますが、詳細はわかっていません。

出雲国府跡の発掘調査では、中央から派遣された国司の宿舎である国司館や金属器生産、漆工などの活動を行った工房地区などが見つかっており、出雲国府やその周辺の景観は、奈良時代の一大官庁街をあらわすものです。現在の県庁や市役所、県警本部などが建ち並ぶ、松江市殿町周辺と同じような様子だったことが想像できます。

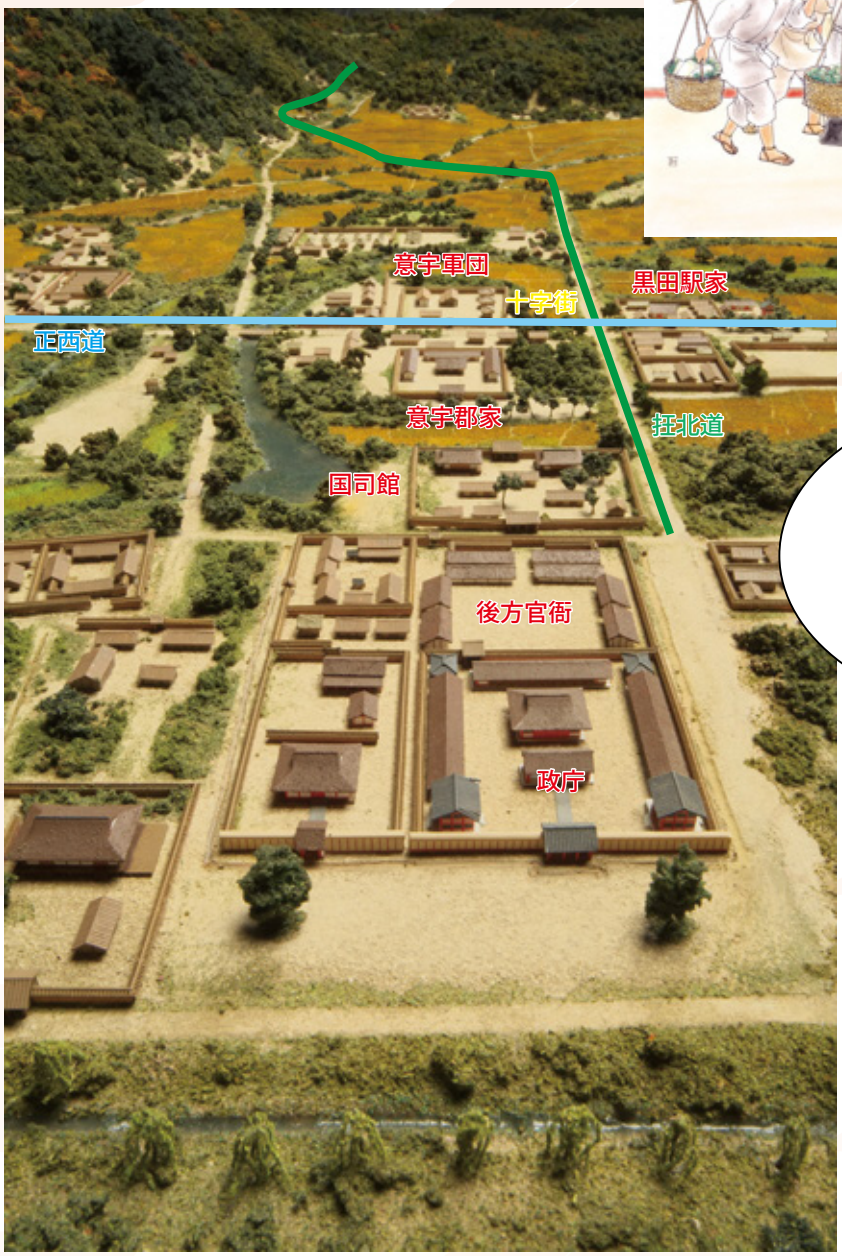
出雲国府跡は、日本の古代史上きわめて重要な遺跡であることから、1971（昭和46）年に約42万㎡が国の史跡に指定され、一部が史跡公園として整備されています。



史跡出雲国府跡の史跡指定範囲（赤線内）と地区

復元された出雲国府

出雲国府の仏教斎会（早川和子画）
（島根県立古代出雲歴史博物館提供）
南門の外から政庁内の式典を人々がのぞいている。



出雲国府跡 1/1000 推定復元模型（2007 年制作）
（島根県古代文化センター提供）

この復元模型は発掘調査の成果と
『出雲国風土記』の研究の成果をもとに
つくられたんだ。
現在は島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
に展示されているよ。全国でもここまで
国府やその周辺が再現できるのは
出雲しかないんだよ。

コクフさん

政庁	国府の中で最も重要な施設が集中するエリア。建物はコの字に配置で政務や様々な儀礼が行われた。	後方官衙（こうほうかんが）	下級の役人たちが実際に文書行政などを担ったエリア。
国司館（こくしのたち）	都から派遣された国司など、役人の宿舎となる施設。	工房地区	金属加工や漆をつかった作業を行うなど、国府に付随した工房と考えられるエリア。
意宇郡家（おうぐうけ）	意宇郡の役所。	黒田駅家（くろだのうまや）	律令国家が整備した駅制における通信連絡の拠点。黒田駅家は、山陰道に設けられた駅家の１つ。
意宇軍団	律令制における軍事組織。しかし、軍団の実態は、不明な部分が多く、謎に包まれている。	正西道（まにしのみち）	畿内と山陰道諸国を結ぶ官道（山陰道）。
枉北道（きたにまがれるみち）	隠岐に向かう道。	十字街（ちまた）	山陰道と枉北道が重なる交差点。現在でもその可能性がある箇所を見ることができる。

発掘された政庁域

政庁域の発掘調査は、1970（昭和45）年にはじめて行われました。その際に政庁正殿（当時は後殿）と考えられる四面廂（しめんびさし）建物が発見されています。しかし、その後、しばらく政庁域の発掘調査は実施されず、政庁域の様子は謎が多いままでした。

2015（平成27）年度から政庁域の発掘調査が再開されました。近年、政庁域の建物は2回の建て替えにより、礎石建物になっていることや瓦葺き建物であったことなど、その様子が徐々に明らかになってきました。

政庁域の中枢の建物　正殿

正殿（赤太線が身舎（もや）、赤線が廂（ひさし））

建物の四方に廂をもつ建物（四面廂建物）で政庁域の中でも最も格式の高い建物です。1970（昭和45）年の調査ですでに発見されていましたが、2017（平成29）年の調査によって2回の建て替えが行われ、最終的には礎石建物に建て替えられたことが判明しました。

文書行政を行っていた？東脇殿

東脇殿（北）

東脇殿（南）

南北方向の長い建物で、出雲国府では2棟の建物によって構成されています。発掘調査の成果から2回の建て替えが行われ、最終的には礎石建物へと建て替えられたことが分かっています。周辺からは硯が多く見つかっており、この建物で文書行政を行っていたのでしょうか。未調査ではありますが、政庁域はコの字の建物配置になることから、西側にも同様に南北方向の長い建物（西脇殿）があると考えられます。

（人の立っている箇所が柱の位置）

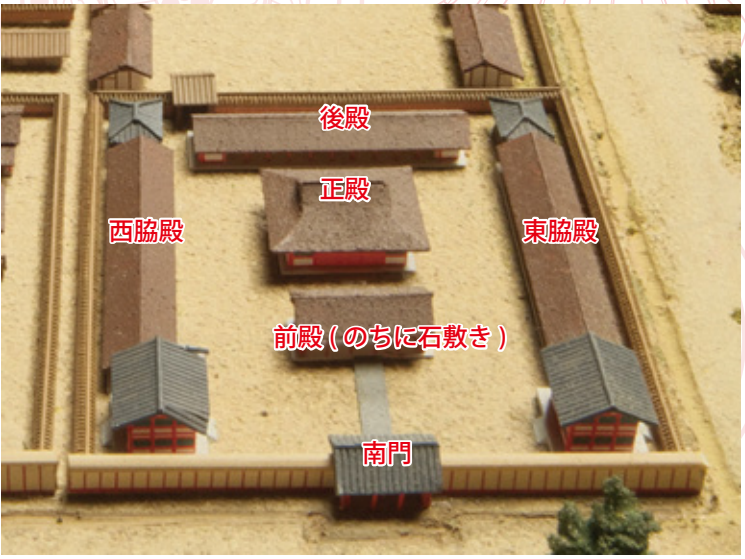
儀式のための建物？　前殿

正殿の南側で発見された建物です。掘立柱建物で正殿や東脇殿と柱筋をそろえており、計画的な建物配置が想定されます。石敷き遺構の下で発見されたことから、8世紀後半頃にはその役目を終えていたと考えられます。

（人の立っている箇所が柱の位置）

政庁の前庭を飾る！石敷き

正殿の南側で発見されました。前殿が廃絶した後、正殿前の空間は9世紀代には石敷きへと変化しています。正殿前の空間が前殿から石敷きへと変化していることから、儀式などのあり方が変化したと考えられます。



発見された礎石

東脇殿の東側の溝の中で発見された礎石です。重さ約80kgで中央付近に柱状に焼けたような痕跡がみられます。発見された位置から東脇殿に用いられた礎石の可能性があります。

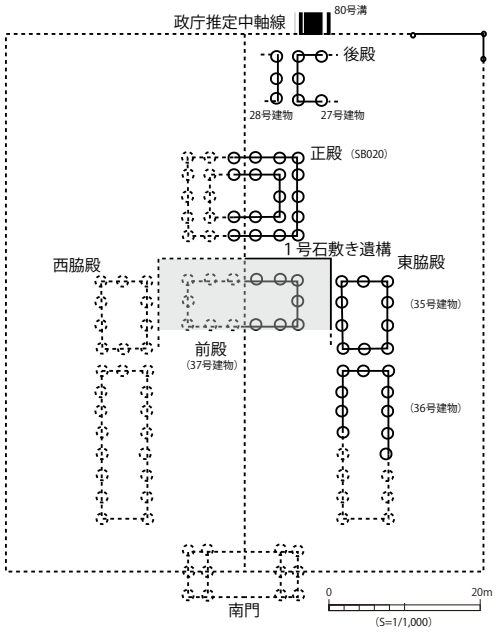
甕の中身は？ 何度も行われた地鎮

72 号土坑調査の様子

埋められた土師器甕

東脇殿の周辺では地鎮のために土師器の甕を埋めた穴（土坑）が多数発見されました。土師器の形などから、これらの甕は一度に埋められたものではなく、複数回にわたって埋められたようです。中にどんなものが入っていたかは分かりませんが、建物の建て替えなどに伴って、同じ場所で何度も地鎮を行っていたと考えられます。

政庁域のすがた



政庁推定模式図
（実線部分は発見した遺構、点線部分は推定）

政庁域の調査は東側が中心で、西側の状況は不明な点が多いのが現状です。しかし、全国的な調査の事例から国府政庁域の建物配置は左右対称のコの字形になることが知られています。

これまでの調査成果の整理から政庁推定中軸線で反転復元すると図のような推定模式図が完成します。この推定復元では東西63m、南北70.8mの区画で復元することができます。これを全国的な事例の中で比較してみると前庭空間の狭さなどが浮き彫りになってきました。

政庁域の遺物

数多の硯！文書行政の実態を示す

政庁域で出土した硯

転用硯（朱墨が付着する）

銅印（「春」は工房地区、「常」は国司館出土）
（写真は島根県立八雲立つ風土記の丘提供、「春」は個人蔵）

当時は「春」や「常」の人名を示す印のほか、「出雲国府」の印も使用されました。現在も奈良県の正倉院に保管される『出雲国計会帳』などの文書にその印が残っています。

政庁域では多数の硯が出土しました。これにより政庁域で文書行政を行っていた可能性が高くなりました。多くが転用硯と呼ばれる須恵器の食器などを硯に転用したもので、硯としてつくられたものは意外にも少ないです。中には朱色の墨が付着している破片もあり、印などに用いていた可能性があります。

現代に残る奈良時代の文字

墨書土器「厨」

政庁域では８点の文字が書かれた土器（墨書土器）が出土しています。文字を判読できるものは「厨」が多く、厨と呼ばれる給食をととのえる施設から持ち込まれ、政庁域で饗宴などを行っていたこと示すと考えられます。

建物の屋根を飾る

政庁域で出土した瓦

政庁域で出土した瓦の多くが出雲国分寺で使用された瓦と同じものですが、中には山代郷南新造院(四王寺)で使用された瓦も出土しています。出土した瓦から政庁域に総瓦葺きの建物があったことがわかります。また、出土した瓦の中には朱が付着している瓦もあり、政庁域の建物の柱は朱塗りであったと考えられます。

邪気を払う！？奈良時代の甲冑

出土した小札
（左：集合、右下：X線、右上：現状）

古代の軍団兵士復元
（福島県文化財センター白河館提供）

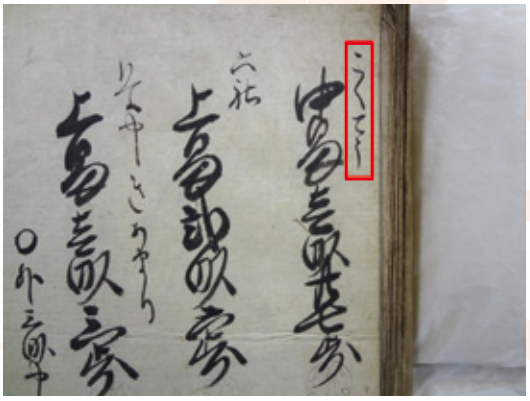
政庁域では奈良時代の小札（こざね）と呼ばれる甲冑の部品が出土しました。多くが建物を建てるための整地土の中から出土し、戦いなどの甲冑本来の用途で使用されたのではなく、地鎮などの祭祀に伴って、埋納、もしくは散布されたようです。

京都府の長岡宮でも同じような状況で祭祀に用いられたことが確認されていることから、宮都や地方官衙でも同様の祭祀が行われていたことがわかります。

出雲国府の調査を顧みる

出雲国府はいずこ

出雲国府跡は、これまで50年以上にわたって、発掘調査が実施された結果、現在は松江市大草町に所在していたことが明らかになっていますが、実は近世以降、その所在地は不明で論争が続いていました。1962（昭和37）年、その論争に決着をつけたのが、江戸時代の大草村検地帳に記された「こくてう」の地名を発見した恩田清氏です。



元禄４（1691）年大草村検地帳
（右上に「こくてう」の文字）

発見された出雲国府～昭和の調査～

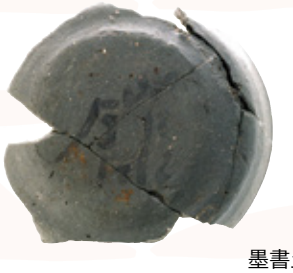
正殿（赤太線が身舎（もや）、赤線が廂（ひさし））

出雲国府跡の発掘調査を見学する湯川秀樹博士（写真左から２人目）
（1968（昭和43）年11月24日、内田律雄氏撮影）

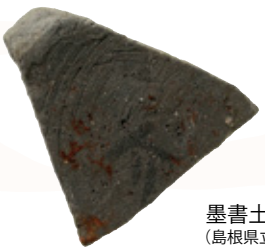
1968（昭和43）～1970（昭和45）年に後方官衙地区や政庁域の一部が発掘調査され、整然と建ち並ぶ掘立柱建物群や硯、木簡などの多くの遺物の発見から、松江市大草町に出雲国府があったことが確定しました。1968（昭和43）年の調査では、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士も出雲国府跡の発掘調査を見学しています。

国司たちの住まい～平成の調査～

国司館（赤太線が身舎（もや））



墨書土器「館」



墨書土器「介」
（島根県立古代出雲歴史博物館提供）

コクフさん

1999（平成11）～2011（平成23）年に行われた発掘調査では、国司館や工房地区の様子などが発掘調査で明らかにされています。特に国司館地区の発掘調査では、「館」や「介」の墨書土器が出土したことから、この場所が国司の住んでいた館であったことがわかりました。

出雲国府の歴史

これまでの発掘調査によって、周辺施設も含め、出雲国府の様子が次第にわかってきました。政庁域の様子もこれまでよりも鮮明になってきましたが、政庁域の前庭空間の狭さや政庁域と外を区画する溝や塀の有無、意宇郡家との関係など様々な課題も見えてきました。出雲国府についてはまだまだ解明すべき点が多いのです。

年代	時代	出雲国府の主な出来事	日本（島根）の主な出来事
450 年	古墳時代	大舎原地区に豪族居館が建てられる。	倭の五王、宋（中国に）遣いを送る。
	飛鳥時代	政庁域に斜め方位の建物が造られる。（前身官衙）	柿本人麻呂石見国司として赴任。 忌部子首出雲国守（708）
710 年	奈良時代	政庁域の本格的な整備。 大舎原地区に国司館が建てられる。 主要建物の礎石化。	平城京遷都（710） 『出雲国風土記』編纂（733） 石川年足出雲国守（735） 門部王出雲国守 長岡京遷都（784）
794 年	平安時代	政庁前庭が石敷きになる。	平安京遷都（794）
900 年			出雲地震（880）
1000 年		このころ政庁域の機能が停止する？	
1100 年			
1200 年	鎌倉時代	このころ府中としての役割を終える。	源頼朝が鎌倉幕府を開く（1185）
1300 年			
1400 年	室町時代	国府周辺が農村化していく。	足利尊氏が室町幕府を開く（1338）
1500 年	戦国時代		石見銀山の発見（1527） 織田信長本能寺で討たれる（1582） 豊臣秀吉天下統一（1590）
1600 年	江戸時代	出雲国府所在地論争。	徳川家康が江戸幕府を開く（1603） 堀尾吉晴松江城入城（1611）
1700 年			
1800 年			
1900 年	明治 大正 昭和	検地帳に「こくてう」発見（1962）。 はじめての発掘調査（1968 ～ 1970）。 国史跡指定（1971）。	浜田地震（1872） 太平洋戦争（1941 ～ 1945） 東京オリンピックの開催（1964）
2000 年	平成	大舎原地区で国司館発見（2000）。 約 50 年ぶりの政庁域の調査（2016）。	
	令和	東脇殿（2019）、前殿発見（2020）。	石見銀山世界遺産登録（2007）
2021 年		史跡出雲国府跡史跡指定 50 年（2021）。	東京オリンピックの開催（2021）

出雲国府全景（平成の調査）

編集・発行　令和４（2022）年１月　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

〒690-0131　島根県松江市打出町 33 番地　　TEL（0852）36-8608
E-mail　maibun@pref.shimane.lg.jp
URL https://www.pref.shimane.lg.jp/maizoubunkazai/